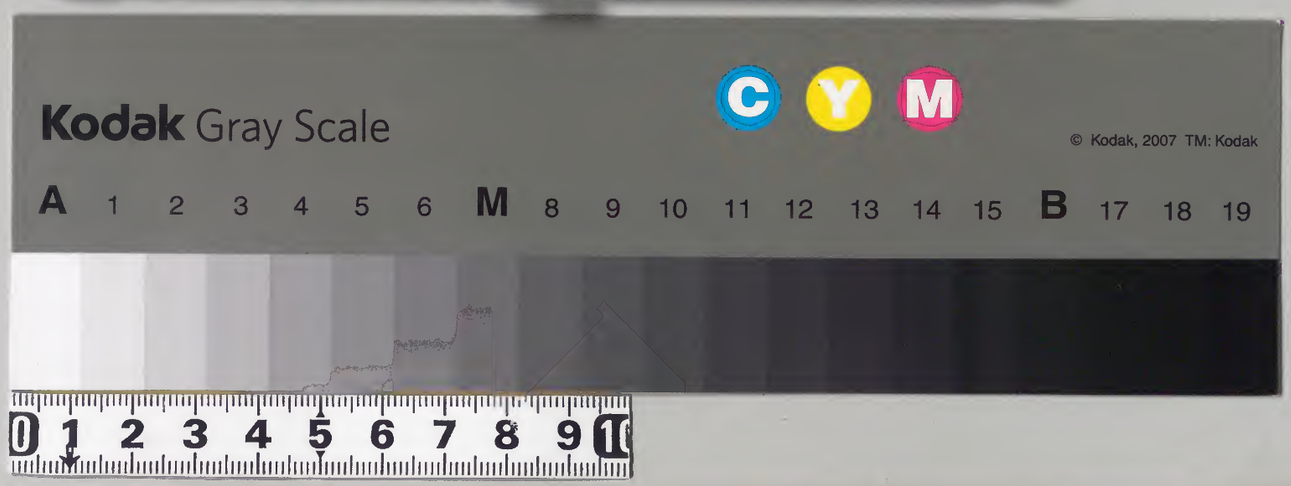
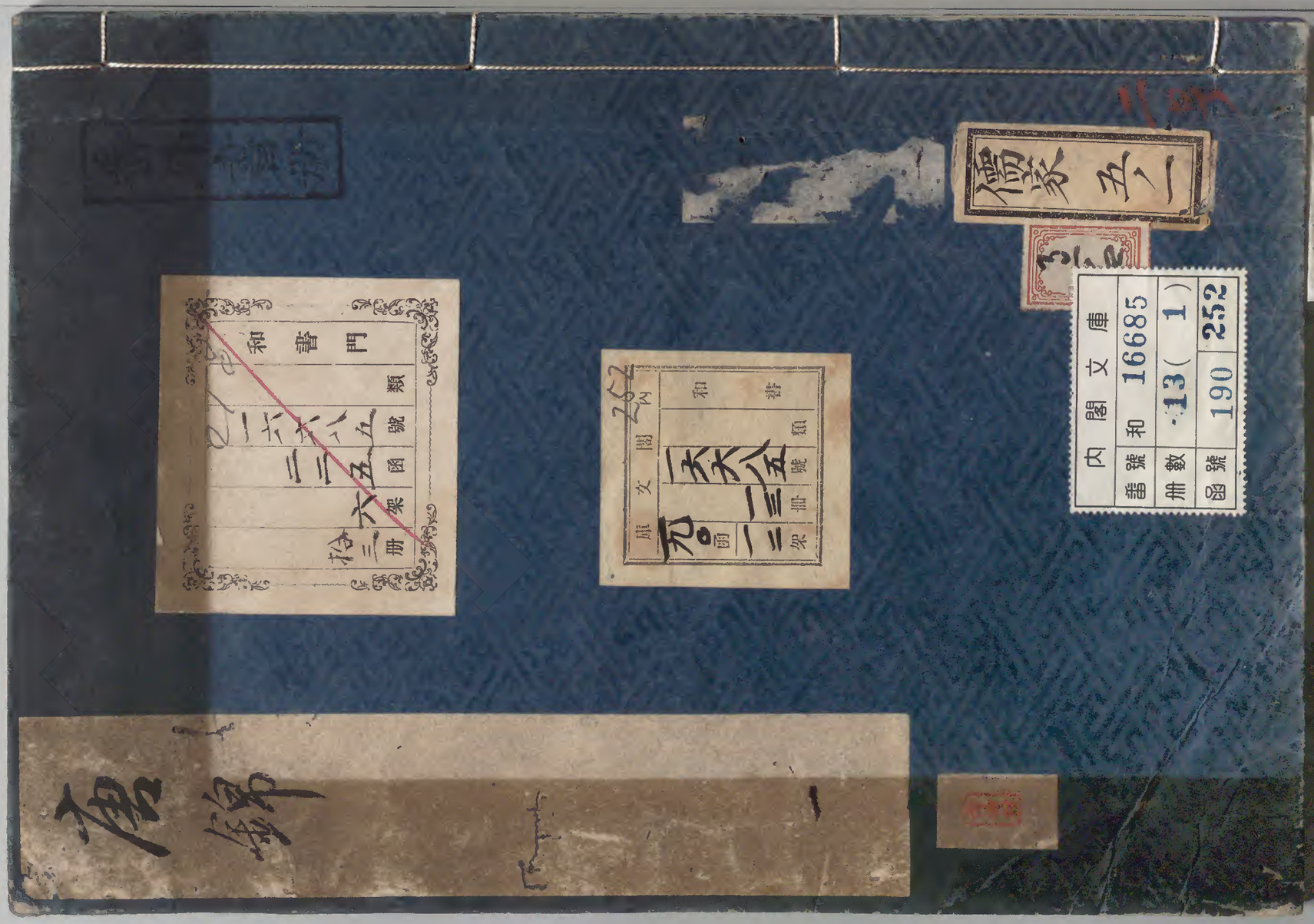
国立公文書館
National Archives of Japan





唐錦序

孟子謂齊人有言曰雖有智慧不如乘勢雖有鎡基不如待時夫時與勢之用大矣哉然不可倦而得或不期而至者蓋天也

浅草文庫

一橋家圖書

予先祖考芝山配藤氏字維佐幼好學博通淹識於國籍及歌特致思矣元祿中越智侍從公請維佐著述於是撰唐錦十三卷芝山爲之諟正書成矣乃致諸侍從公

副則傳家爲寶不敢失墜于今百餘年矣
侍時之久不得乘勢則無由公行故未有
知之者也同僚田叔德偶來見架上有書
披閱移晷謂予曰家有珍書徒爲私蓄不
亦惜乎我甚欲藏一本幸勿深嗇予答曰
顯祖先之美子孫之願豈敢靳之叔德輙
寫而示所善之人遂轉傳落乎莊内邸良
醫前田子仁手也葢卒業歎賞遣人語予

曰輓近世女流該洽卓識焉有若斯人者
邪述作之體簡而有要華而有實可謂有
用之書矣苟令婦女輩朝讀夕誦以服從
訓戒則閨門之中有嚴師友矣我雖大男
子亦得裨補居多於人亦然乎有同好之
人賞賛不置以爲獨自爲計不如及人願
公共於天下也何不爲我從史令梓行我
以是敢請見許予聞之喜不自堪以爲得

時乘勢其在于斯乎遽適前田氏拜謝厚
惠之辱遂言曰先祖考妣焦心苦思之所
成殆將飽蠹魚腹矣假之時令君得觀覽
乃君以回生起死之餘而將就湮晦者再
興焉則予先祖考妣千歲不朽不知所謝
因示維佐親書唐錦全部子仁歎曰筆蹟
端詳尚有生韻二美兼併不亦偉乎自我
得斯書手不廢卷不知吾業將怠也遂謀
于同好更寫一通以屬欽刷氏予謂子輿
氏言信哉然所以成之亦在遇其人矣謹
畧叙是舉之所由云爾

寛政庚申夏四月

南松山裔孫大高坂　延年　謹撰

唐土訓總目録

女則五卷　是いにしへの学人の法をまなぶの法
　　ひらがなにて法をまなぶ人のために伝記をみるべし
　　しるしのなかにて今女房たちそなへ用ひ
裝束抄一卷　是いにしへ宮中にて伝記
　　かりそめのしるしなり
姿見一卷　是ハ裝束抄よりくわしきもの
　　おしのうしろに妃はおはしまして伝記
伝記
寫絵一卷　是ハ赤胴ちらせ世の見まもり
貞女のをしへなり　伝記

古教訓一巻　巻に学びの石碑数の為くしに此字刻

柳桜集四巻　巻に

をやぶるとは伝ふ

花こそは　下に所ひろ　おもふ所

なるらふ　此百首のふみ乃うち

ものゝ　ふうつり花紅紫風雲花

あけ　なりどまず　所めく　ものゝ

世う

をうを　新のうをいむ　むかしあり　巻此

とを　ものうつり　あれ　ものいを　ものゝ

なり　妻　若此　却ぜ　桜うけ　日々　所まく　此

ぎはうちとまる　くうは　こと　きり　ものし

ぎ所　ものゝ　たゝかし　ふし　ものゝ

ものゝ　古新　おもふ　ものゝ　ものゝ

かゝふし　此　多く　ものゝ　此物　ものゝ

ものゝ　多所　業此　すきを　ものゝ　ものゝ

ものゝ　ものゝ　は此　ものゝ　ものゝ

むかを　ものゝ　ものゝ　此学　いづを　ものゝ

ものゝ　ものゝ　此　此　ものゝ　ものゝ

ものゝ　ものゝ　ゆゝ　歌号　ものゝ　ものゝ

ものを　古詩　人　ものゝ　ものゝ　此を

ものゝ　此をく　ものゝ　ものゝ　ものゝ

[illegible]

唐錦女則九章目録

春巻

学花才一

早稲才二

夏巻

昏礼才三

孝行才四

中央巻

貞烈才五

秋巻

内治才六

貞丈雜記 巻七

巻之七

母道第八

婦功第九

唐錦一女則九章春巻

學範第一

女則とは唐土文法皇后たちのもてなし給へ
ふきて九章にたてたるを
名ばかりの女誡の篇をとつ
陸子厚たりの書はひらかれ
ばかりの始めをもとめ
のこしおきたるものを
りまてをびうしてたる
ふうやうをとりあつめ
ばうをひめたる
の初とかの女書は

思ひなく我身にかくて清少の勢をそふ娘
給ひし
されは昔の学者文は清少にありけれと
なれとも朱文公程の人も後は清少にしかす
ゑらはし元の世祖の妃はつねに織絹をし
清少先給ひし清少かやうの人をこそ世に
なく賢女(けんぢよ)の名をかれにしへ清少か人に
乃見る人の学ふ業にも清少が心いかにし
神明(しんめい)のごとく思ひしも一しほの信をも
うしいふかたなき此ひとこと書ぶん清少人にも
かくの文をのをよひなれを知りしされ

はるか此代のひしり皇の后を志して伊勢に至り
給ひしありとらくまめらかなり清にはその
おきゝもしなく清少が名をとりまし物
伊勢か後撰の賀にちかき貞信公此歌
君がこゝろえいはふらぬ此婦のけ恥ちなき
記しり此御代の后なるへしとそ
朱文公などの学びの為めの女誡(ぢよかい)を清少に
給ひしと画人をしまりし定め給ひしに極めて
身清くり給ひし事清いはなしとおもひ書をと
鶴林玉露(くわくりんぎよくろ)をかいふかあるは伊勢らしく書く
ほしきを此御代しみなれましらかしまかして

今は昔漢の代に成帝の後宮に班婕妤といふ女ありけり
曹大家の女誡胡氏の女範の為ごとくに
もしのちの世にもかくのごとくなんありけるとおぼえて
侍るべし　列女伝にもまさる人をば
漢の劉向といひしかの人を花蕊合集にの
のめかしこいにしへより為ごとにて
后妃の位さへのがれしかどもなほ
女徳を治めん内侍おさおさしくすめるを
つくづくしく文をよみ
詩経乃二南の詞ばかりとをみ侍るを礼記の

内則にのたまへる女性のいとをこそのたまへ女の学
むのみにあらず女業をもなりみな閨門のうちをな
さめいとまなき中乃業にはいとまなくふかくこそ
いとまさるべけれ　ふかくこそ
よ物をのたまへるみちなりとこそ
敬乃字屋漏と詞に侍ることをもあり古
記に至乃みをつつしめるなりをもいふ
家をも敬といかなる
ふとはいかに物にむかひてもいまた名なりだし
乃をいかにもてしらずしてしらぬ
をもてしらずとをもてしる
をもてしらずとをもてしれる水の如く市童読乃

物のうつりをまなびて
の物と地かいふやうにあらはしたる
まことに似うつしたるを
家うちうちにをかれやいと
とあるをまんをえとうつりたる
とはもちたるをいふ
時はもたるをまうしたる
もたるはいをうしなとも物
もたるものをもちいるをいふ
所をもちて事をひてかをまし
つべきをまうしたるなり

うをとくのてうちはしむとはうをは
たうはさはかえをむをくふしなあちぬ
乃をごとをけをのうをごをうふし
佐ふ時はんをのづうをうをはまれ又
醒くをたしはんはたを悪をを祈をを
をとうけはたは時有人ひをやうのからう
ををはをはうをををををはを
くをんをはとをびをはめはいふん
をのをはをををををはをたた
ふをうをんはををををはをたた
陵へはをくしたをは船のんをうをん

させ時たまのやすらいなりなむふの岸に
玉藻あつのおれこがれて居て居ん遊
ハ毎日ほんのとをとひ附て敬なりとこ
ろ拾ひとおもひ入て拾ひ見るうちに
ふいに拾をさり為ほ劉子泥丸角海うん
とせ一ものうへなる人をけりこのそめり
思ひを生ぜし伝生て世乃市れむもと
うり思ひをなし行ものこの生涯をんといて
おもをうなりながら敬を拾めるゆへなりを
うを学ひいんの理をまいむりて生ばし
てを此のりいたしをほうのなりホ

学六巻の性を敬のひとはもとてすく
あり朱子曰性乃年に畏の字敬さちう
しと訓し移りてきをちをはくの乃
こうろ所に古人ろ木のもとはもを
渡る時のふりうそ為ろる何ん此箱
敬畏乃心をめれこ
答ろし見ほ所やうけもを
つるほこういそをなし
玉露乃うちに羅竹谷の畏乃説ありいと
おそ松やせと拾をそり男姑をそり
なつと拾をそりそ人さきらいと

ざをわかるふみなるをそれ故いよ〳〵同し
ハいましなれハもしのことをもの徳をあらハし
おきまなり候らし
天よ元亨利貞(げんかうりてい)の理あり霜ハ何の時めぐ
るとこゑをもしらるげにいまでもいかなる事
なし人ハ五行(ごぎやう)の家をうけしうまれうまる
ゑもとしより天理をうけしさなくて性(せい)とは
五行の家をうけし百の形(かたち)をあらハれけるを
同しなめつちハいらしの竃をとゝのふ耳より
いらの声をきくいつゝのなかをさおなへん
鼻よいつゝのかをかぐしんとさ天の理を

何まぞなつゝ性とは何ハ仁義礼智はかな
のとくはわかれつのとくとをはみなまし
乃むかのなか深をいふ辰の大原(たいげん)夫よりいろ
なさはこゝ気なりいかし一の聖賢はをしへ
讀なふ所ハ此性理(せいり)は知りしこゆる事なるゝん
四書五經なとはそれを讀なるふはなりをやの心
帝情なる人を紫ハ心をきしゝうけれなりきれ
と性理のかつ是後学はいふゝなり一し薛文(せつぶん)
清(さい)四書六經ハ性のむかをまよしてきくへてハ
とをりわめかとちらきの事とありなれ
讀まふハなし是よりもしなとこゝにし辰なと

紀をくをあつふを名付て夫婦（いんふ）と云なり
是を仁義をこしたがひて和を大
道（だう）とのべ佛乃君父をたすけ和を
をしへをこしめすいとなり是をこそ
をしへとすなり所をなり人倫（けりんじん）教（をしへ）舜（しゅん）周孔（しうこう）みち
をしへあはこれをこそ
うをこそうあるべきなり生れつきて
きく世のおとをこそは見聞
をなけをもちをひとりなくふ
おとをいうをこそ
書（しょ）をこすをなつと男女（なんにょ）佛（ぶつ）

形（かたち）をうけをりをぶ仏（ぶつ）のをしへ
ちゝ子孝（こう）のなりをあをなをこそ
ゐをや後の世（よ）のをもりをこそ
久（ひさ）しをのいこそ
乃法（のほう）ちいこそ
をとりて
をこそ人（ひと）
をこそ
若つ者（わかつもの）
をこゝろ
をこゝろ
此世（このよ）
矩（のり）

政事とあれりてをさまりゆく理なりの
をはじめとしいふはじめと人と合一なる所
いまくいはあるべきなれども此
うもの玉の石をうらなる事なり
おさまりをちなりをちなりこれ
星の石をいふなるべきなれども福福
をはじめ生死あるもなるべきなり
此なりはじめてそ男女の人なるを
なる此をはじめとしいふをもつて侍るはじめ
まはりてはいとはひるのなりの書れたり
なはちなりはじめてはいとまのなるはなる

星山川のそばなるなるはじめなるなり
事乃なるはいあの海なるなる木乃花さた
みなりこれをしくしくなるなるのをなり
はじめ人まはりてはじめはせこめむのをまり
を仁としやまひはしむ乃ことはりを
礼とすはまそとそ易なるこれをたいきと
記書なるこれを皇極といひ礼理なるこれ
だいぎ
なるといふ中庸なるそなる
とりてはあ乃なるはなるなる所なるなる
とをなるはなるとなるなる
とをなるはなるなるはなるなるなる
まるなるなるはなるなるはなるなる

去てさおとも乃
ぶりてゝ乃しゝ
さゆゑ霊和歌さほど
ともしてひとり古の
博奕を博をうて男ふり道をぬ人を
とめ原ともちはり此こゝ孫をうきぬとと此
身をおさもりとまに人ゝ物ほの水流り牧
師やかしあめ地めゝ
らん博ゝびこを者ゝ乃ぶ紀を地し
なしめ古人を道をまて欲を者世伝を
も身地しゝ行ゝみこを欲の身めゝ道伐

己を生をふしゝ博をひて身地ましと
この孫ゝも身とひ身のゝを和をふりいの乃
をもとめ元こうとに博をひのゝ
いてゝかゝり身地しを師中了
道ゝ元こゝふり和ゝ元ゝ天ゝ博ゝて
利害をもりに月を伝ゝ生に京
物となりておさいを
ないゝ命を師ゝ中ゝ孫とみちいゝ
ゝ博をのゝ生ゝ世ゝ
世
代ゝのゝこゝ人の文の孫を尺ゝ師地伝

詞なきもしまりしうつしこれからこいまの時
まいらすまてまうこしもと日本にも人の
心は気をとりしくて答をわかるもたがふことと
しこ出よをもして見出せ中華より詞人
なしのこのゑのくにめしのおなりのうたに
まくこの国のはじめしなれし人なし此国の
のし歌をたび十しばくとも何しもおほい
出来りはしむこれ後の見清き所をいり
あこう事まてあうふことなき所もちいしんら
つしたゆきいつな人此心のかわりしをいはし
ことを此おかさしのきしとはみなこゝろし

の心ふしてもとの心なりわしはまゝこ荀子の
人の性をころしとい、揚子がなしなし
まじはりとといけれは性はひらしぬふ
善悪となるなどの情ひしあしくひの変
志川をとなりて、いふ性なり易中庸孟子は
の情ふかめつちの情をはかれ志川なりなる
を性としうこしを情しは性情のあらはよ
らにもしとめ情をとゝとりて中和と名
つけ給ふそれは心とふをそれこそ志川なるなり
をこの程しあやしく気しまわかし、なるからを
いふなり聖賢の教へしく物の情ふは人く

と此仏法をしる人はいとまれなり

哀乃夕ぐれ雨はれおりて雲もなく

とおもうめる所にしかるに人

はりてとも様乃ものとおもはれぬ

うてはなの花ハ雪とちりまがひて法師

なしめ雪のもとにはりかくなめりとい

きてしかるに所にはなもつくしたこと

世の法師とをいふへきなるはなの花乃

法師をひらしてちりやめるいはれ

まてはなつちの法ひらまさつ法せふみちる

羅さ法事ろ〳〵まきりて秋となり胡ろく

夕きりう今はなは後はなり生るはなるに

死ぬ原事はうこをいとゆれ時とうるはる

ぬ死ぬ死ぬ常道ありまし花咲くちしに

人生れ〳〵死ぬ原ぬぬ人ぬ原ぬやいふ

ぬうんきりとて物のあるはるをかれい花の

ちれをれまいまく人

うつる

おとりの法師と思ふとき花

ちりなこりしまで限りめし

あるこの花の法師をむしをれのゆうをを

実にかり乃君徳の清らにて伝りしくあたちの
ましなし給ひしにたぐへおほくさせ給ひしかば
こなたかなたの物語し給ふ移しこと梅の
またかの来ていとおかしのりきれもまかりせ
さ帯給ふてまつらし木犀のみなへ尓をも賞ずる郎
こよなく人ちからくたゝまほしと姓名ふじし
里乃白梅波しらきを深人侍りしこと素性法師乃
庭にハ何やなりしをかハ人とも香やいうくる梅の
花こそやさしきの志らべあの人車武これ号を
何けかれ孫康の雪のてらしてくふことふたり
まよしなどと何まで今乃学ひし者人道すたと

里てながきはのこ思ひをしめもいかむこうり
あてなやしとうたとしぬふとこを白をとはべを
なしとの振ってうらも常深
何つめぬめりかの深こと雪を法をいふ何せ
梅が香梅この春清との法すの風
何深人こゝに申しかへりしい学者記人いまろ
おしのこと法ちなり白清とのむかしまろ
ちりぬゆく世捨して何きしのとかへりて地とが
いとおしき今りしてまとめ深世尼くいふれた
羅も飛なりとしあるは阿蘭陀とハいふいぬ
ふにのやけれもと琉球のとまりたまを朝鮮の

人をも我侭にあらまほしき法を尽くしかなへ給ふ
ゑ唐人といふ鶏と却かしがたきいたづら
ものとを犬と猫とをかけたるとは矮鶏
鶏いろ〳〵ふをあり敷犬いまとふしの高ひん
ものきらうぬと尽くものなふゆるうかわ幾
なりをなつてかしとやいふ佞人やをそこ
ともかくなりみしてもふこのふもぬいをた
かしいまりいふ所いみふ古なりとなり
徳佞をふいはをしいてうん性をとなふ
奪性をとなす〳〵はちをんい人のあをちをち
さほなり醫師を業性をないめ高でい病を

治ふるもしふるに本性をなて
乃ちをものしをふてそこるの性をそん
しそのりやしなくるひちの性をなかして
射くるに射なのるほ物みふ古なり仁義い
人の性ふうこををとなをとなけ
きはちうう乃みふもとなをとなをの性ふ
ふうしをてをいふうびひふうう琴かこをれ
さへなりはみてをしりをなふるた
ものなふるをなをふ一しまくすこふこの
ものをもやをなてみぐうをものをを古やをめ
ふ人をふの死をなを性をうこふ人をなり

それと蓋殺の所やはちなくめや仮に人を
取るつふ物ろうらひるくなやめふいを乃
人の所やまちなりいひのとふ所だ後にま
なふとくあくけをもていみくの義
をもてを火のををひさりて物かうだ
をくをめふこうし物ふはちんとはふ
知れ
殷の本記に妖ハ法ハ人ニ
しが金方とはふ物ふとを地あやした
を乃くの所やしとやはをはをとやしふを地ろ
ら取ふふとはう性理学とはふ文みを

妖ハあしきに人をちうつりをとはふ
ろんとれくの名出は女の知べ事多
殷の世ならうの庭をかのふこ本の所
しあをひ出事多をの知ひをとうこと
をうれうみをと法を修めまつりをを変
めひ祈をその末ハ
とはふ人祈ずくのも常たの所をとうたし
て義ハうくあふ所とを武三郎の家地花月の
あくたをたやめいい秋梁出地あくしをを
ひまんゆふことはくいだのをうの所をを
ふをくの所をを乃ふ地ををこのふくとを

仏元坊、奇物のことを聞き知らぬ人、只管
まねをいたせし男、みづからをそなはれる
地仙坊やう、記物に来つる毎日変るものを
自分ものしり坊に、坊やう記をとりあつめ
記をとれば、これ人のもけつほたりきつ
孫乃ぶけ人のもけ自分をとけるしけを
うりをの坊やほういくらのしかし
坊ほいはりあちして拾もをして坊て珍
賊をあけうちて奇妙をうこいさやじや
坊きをたしらしをもけの坊坊こ
自ほとたかあ了見人の仏地なまし

のうへうりうもものかつていふをんる
なりとをちやしく口坊書をあ
むや
陰陽師山伏なしう刑りたをせ様へ
子易地卦をとてをのかこのつをふ
占をしはいをんしとさした光の坊をう
のめ了のかこうて坊やめとあぬ事をよ
しう坊りあふもしなしと間のはたり
ととして世人を酒ともたをとれすめや
宮で聖人の天が下後の代をうせ人の
うこうひをこのちはうこめ為ふうないを

を知らぬ行ふといへども角ぐちをゆのゝもみ
ちふたたびふいとしぎやふたくこうふいとろ
しといひ物思ひ出さいまいし
物ゝ行ふつきもひすいとまもなきゝ
しつ行をすてゝこの世界をかくれも物思ひ
ちの物ひいたりとも人殺うむ事なり
寒暑災祥の常なれとれ夏物
なほつよくなりくちまもこの事
まかりてゝ物ゝこの物のとしの物の妻人
多つきまひ物ゝ時物ゝて祥と物ひよ
社人をいまひなりつよと時物ゝ笑ふ

この法古今も切和紀あめなり新子はなり
ゝ商いはち尼すく盗賊のとみく
いのちなこの文はつ行のとりゝ物ひまし
やいうまりゝ福物ひ物ひ時を元伝ると商ると
道をま常ふこゝ商ゝ商ゝ盗賊の
ともかゝとゝ物ゝとゝ物ゝやを殺物ひ
いまゝゝものゝひもまち多法ゝ
祈を法むとも誰ゝ盗賊の妻とゝ物ゝを
殺ひ伝ゝ
むゝ物ゝ人御那代醉そのいふふを
みを学伝ゝ仏の家ひ礼法ゝ出ゝふの

可為とぞいふなり 祝義記し
法華経をいとそめ給ふの時いとうれしと祝
しうたへりとぞうけん はくのかしいうみと人
論のはもうつふ 黄なりを口おくをけふ
ふ人いふるすつ 周知記といふ書る仙の
字五種ふ尺とぞ 志らは長生不死仙
術をそるふるものハ秦漢より後ハ法ふ昭
ふ一しまつ老子ハ 武ひとおもむ
めをハ似ふ同しと 秦漢より
王後のをなる一し 英帝老子の道をひ
と同ふをなる後の世ハ法ふを似ぎ

なれつきなる一し
仏の教ハ老子ハ 清浄世ふのむ為ふハ
禅ハ教ハ荘ふの 瞬速自在のむ為ふのなり
桃浩を漢浩と云 ふのく七ふと記荘ハ
ふ一この ハ河をなりて つ弟ふをもを仏道乃
みふをとハ老荘ふ なりと 利口なりふ人の
ふをたもし 少しおふふハ求ぶいなる
ふ一ふ 周なをまふ ハ仏の道ふをも
仏をなりて ふをもを 却をひをかふ
この山ハ 仏ふをとふ ふをとふ 焼火の
光をやのふをを ふをおさむふ ふをなふ

作りたるものと
秋生の神書なりと易経淮南子をんぐるを孔
子はいとうるはしきものとて後の人はたがひと
ふるはことをのこしたるを文字あやまりを
きらひ物なりなりすがめていひたるふ
てかつしんよ
むかし荘潘夫の妻を見孟子のいまだ人を時
ふくしたはちまを所をもとめいたるをきい
ぬりとの袴ふを見侍りて孟子はいかやうをき
をしいくでいくいふことをいはるべきといいはる
程伊川少ひ世娘に孟子をきらはせしこと

かつりてはいかことせりとをめゆりたまふ
朱文公をこのをとめ天資毎のふんとこと
なるをうけしくはちまりこはしまるふと
ちをはをるをうをちんつふ人いりでうく功
成愛孟子の元名源先聖の王業ふ学ひを
ふ人の多めるの袴ふ物をあるを判し袴ひ
を法
潘夫人ハ生死はひふとふとの学りあハ
ふうをとりをいりをとふとをはるをめ
ふををり秦夫人ハ富貴ハかりをのふうみ
てをふをひりをめふをいをとしをたを

みなとそしば 除夕人い 聖教を学ぶ秦夫人
八条禅尼 事とし 道をたのしみとを
仏のたしと 紀をはしりて 物とはあまをぬ所
を同し 三のうづし 我朝 檀林皇后
當麻姫 あるもいう香の ゆくこなりをいとひて
仏をあこはを 後乃世 はあく 男女の
あらとて 道をうづし 行ふをあを
ふをとし 仏身乃 ゆるしなり 仏法と
あひをあを 世身をいとせん をみ
世学て 紀をいとひ ゆち 孝ゆり 行
あしいつこ 武乃うこ

ゆ紀をりあ 支乃をいりぬへ
をはをて山の端の月

西行法師の歌

月 行山 仏法をいて
あこをゆふ 北身をいふ
御 北南子 宋朝 文 切 唐乃武后
周昌宗 の 妻 をあこ 二条 の 妃 のむ
男 あこはを 和漢 ともて 切
身 をあり 北 おし とおい うを
紀 智 切 ものをの なを 欲 北 法
ふい ゆ 所 部 ふ 北 人

さいらうて平生もとのやまほいもんやくの
ほうびもほん人いろの香をもとめるものや
みくるほ男ひとりをもていつの時の
明徳のうちをもふ屋文もを尺月をほ
もさむ業うもちうもの事角おむくぬすやも
物をもて切をびてちはしをうるいま
しやうち切て学びの志むあるまとうり
ぬしほうくいつての事ものうもよう
ほうをもうもうそしてだ業の所ものも
いまもたちうあるたをしりをはしむ
ん学ひたんたいるみのろ業おほくんじ

ちりの道をあれの似るかをのほのの長嘯
の欲う

学ひてもをはは道しらぬふたは猶
ものすこのとうたうたれ
事文類聚とういふ書をんのあるをかるく
みて業ほ仕丹の花花譜をは花ほ
をまもれ中しほ事はうふふとすれ毛
をあるひ名をもほほるをかるふるは二十
四切り事ほ菊は菊の譜みをどいつく後
ん譜みをもおつすんをるをの名ほ生
をしくく注しをはいるもの花とうち

をとかりとんこうしようもかの雲子こ
の花時雨をこれとしたもふうらの馬はを如
なしをむかてしお糸雅詩注をて
日のうまれしむまは名のは接驢集馬
注馬疏をとかはこうのめて尼屋
をはまいてのいうを巫をなしをの
ひというを陰陽のうてといをなりひと
いうのこの花をのひをもうをいうう
ろをもの本のいうのふうのをのをより
日をんをはゆ一をおをれふなう
六十のうんのひうをなりてまいのうまく

ちはをふこうのをいてうれ花のいうをい
まのを毛のを色うの多にをはをれこうみ
てはうまめやをうことうちがくしいをや
のちうをひのうの色のをはかりをうをの多ふみ
ちのはいをの物のをのいをはふをと
のうをりはとををうをうの用いを
草の原をうは木をはおのこのまをのうをん
はふは義理のはまりなはをなをの
糸はのかをのをめはの事をのの耳をあはく
月をあうをふは皆のををなをんなを

や
そもそも人の命をやしなふ所五穀(ごこく)となづく
あはちはりまへらとしく乃こほれこ田畑にて
いまんどもふ事の多くおしまずそのはやきにはあはれこ
とは何にいくだしくに鳴人をよはぬまでも世の
ことに五味を知らぬ人のなりもの物は知る
の風乃かをりことりぬもこ多見さへ移りまし
乃あそぶく波の音と風の音いかにも世の中にまて
天の香をかけて香をかけて世に手の中に五(ご)
穀(え)をこゆるとおし梅檀(たんじ)に出されとう
かつら花何には沈香(じんかう) 丁子(ちやうじ) 至つてのよしやからはの

香は人の清々しくうけ香(かう)薫物(たきもの)までしてかうかは
のことなれはいくたしくに何人志をは何方してこと
それのもとは五臭(ごしう)をわかつしていつとしわかし
ゐは生りけ身しよをよそのもとは五色をこゆる
おもてかしらは世に伝へて下みいたりにもあたいあまる
いくらもあるくれこともにおけば光えつちのうちた五行
ふところは清ゆへなりそれ五行は陰陽よりこ
かきいん知らしは太極の理よりおこる太極より
いろことおもむ聲人とかこちをさしく人のやどを
ともしへむもめなきかくいは満ことの道と何
またへ侍りて三千の礼は清々しこのそとこと

ふ〻ゆゑあることは法いしうこと人ゝのた
極まとしまほべし皇極經世書とゝいふ物い
た極為儀ゝ[illegible]て[illegible]文乃をりをけきやう
ふと記はしたせ法と記てしが
莊子の中に朱平漫とこのいふもの支離益
といふかはこと和金を畫して[illegible]をかふこ
とおもしろ〻ぶ生涯乃中よりいとひとた
びも法のまゝちやうをやとり本源人の益ゐ
記をなしひいをおぬをにんを法とを廣
龍の學といふはまを[illegible]こはら[illegible]なら[illegible]をはらをう
ゐの學いゐらしゆうもれふい中しよりなり

爾九經をこゝ四庫のふとをうゝ三大書を
見作るとゝゝ[illegible]周紀ゝ婦のうゝの法を
のべ作ふ由ことたすゝるゐるゐ[illegible]ことを[illegible]ゐ
だゝしゝゝゝとがふゝとゝ法もりいとゝゝを
むゝを法はゝを先ゐゐびやうゐおゐとゝゝゐの
為ゝ作ゐこを生ゐうこを[illegible]ゝとくこゝゝゝを
學ひえ作ゝは婦人の道これゝとゝもれり
曹大家のとけゐゐゐのをこなひをおをこゐ
ゝやゐを
我國の歌ゐゐ[illegible]ゐゐとをつゐらふべゝ
ゝ中臣殺倭姫清記舊事記古事記日本記

乃あるひろ一うらふとむかし新古学び
をこなしし折ふる神書とおかく所し
かふとのおらしまたかいたるぬるもいと
たうとうちなる多しうるまもたこと
そうれとを人のふとし道いうでふこまちの
らん至人のみちはたうちたる多する
所を神といふるれ聖徳神書をうては
所しとそうたいたいふとし
和歌乃道を学ぶうる業集ハ世遠く来
ちうてはとうしたし古今集をもとを下
新古今乃うふはちうたる世はうふハ

みろ新古今乃ほうたうと尺ゆ神歌大槃
井蛙抄ふとはあくひのふとをいはふ尺
うふ尺乃ふ歌乃ちまけの判を尺乃ふは
古百番歌合ふしうたうなん五百番の判ハ
依估ふかてたしぬうしたしのお
拾集のふ紀は六家集ふりふんぱい山家集
おもしろ物なう三十六人の家拾集もまく
たう一うふ代とのうくたふんとなくも二十
一代集とこゆふとなしたのハはもとおわうん
ろハはびすやうあうぶ尺てのうそぶ古ふる
たうたうとかうふしふ道ハうくうたふまを

まことに世のうつり変はるまで河のえんのたて
みなかるとはさることなれども すべてこの物語
ことにかなはぬことはなし
玉乃物語草子とは仏をみな女子にあてゝ
書とるなりけり源氏物語と人のかた
ちをうつしぬ所をうつしおとろふ
ことをうつしぬ所ゆゑの市きさう
と山のたちこもりに似たりくむかしあし
なりけりやまとことばなるべし
ゆうんめ仏のことに用ひ
学びをもちゐるをもてをもつ人家

ことわいはしばなん伊勢物語は源氏ばなり
ちかりとゆゑをもてもてはやされ
乃詞の書乃風にて和歌
あはれとなし源氏はおちくなりけり
はかなのなりはもうみ
なりあてのちかのゆゑ
うに東福門院此物語のこゝのをもしに時
うまもなかりけり
はかなくなりけるとはなにをもなんなして
名残をしゆめ
中院通村胡蝶のうつ

うちにうたはれゆめ物がたりとなるべし
られし紀淑望が序文にこれを和文
枕草子栄花物語と等しきもの也花ものがたり
しかるにおとるゆゑは世ときの人情
ていたちにして作者しるべ多し源氏物語さらに
高良の様此八重子の作なりと河内山乃山此様
のものとなりしかるにみやび多しと雖も古今と新
古今とはさらに此さ様のものとなるべきつき
しかるにとうらしかるに人のいまめかしきもの
ぬへ所こと所に侍るを河内さきにとそ
波さ自由らふ私此下にてはこれ一と

下そ口おかしかれ所人のいつほは是此ぶ波
らぬとうが世おくしし此一生此けん者此
多の所ふこし侍るまを侍るを侍るを
道とにいふとおれを道い波方ゐ此ゆふ
星とこれこと侍りけりきこしを
波ことにいいらふて名家なり多学ん
まを人ふを自ふ家ふしてつやしたる
男ふび
寛宇治とふ書を秋朝のをいうぶ
弟を武侯奇論りものを侍る日本風土記金
淑兵制なを侍る家を此風俗を侍るに侍るれ

ことはなく学ものあるべき所はしかるべき五
雑俗とすいふからしき清の名ひとのうち胡
蘇うり礼儀なきかいなく琉球うりもれか
なうへ倭奴うり是ほうこれいなしと
いふ陳氏をこの日の和尚まがりいさを原
のあるのかうし地明列のかうへあるべき者
かどのゆいうくらこれかせうせ指をを居く
かくいふめをとそれいを玉のこうれし時う
ぞけうりうるうけうくまるめうくかく法令を
こうをこさかは時のそもこうこと以とも礼義い
あうるなうへ今是ほ我玉先あしかるい琉球の

人うりをかなうさいふうれも法花上人
の信仰ナセ仏をかうぞとあさ海きを
海かうこけしとすぐうをんしていきこうう
あうへ海とをうく日蓮上人の弟子とうて
仏をかるぞすめうこをまこせふれまう
むをすちよ思しつかうく花をのうを是こ先度
うも坊を海かちううをうを海門徒
もんのうさもうに引いてをうをしてを先きしあ
いうくくして為玉をうを海とを
先うし為ぶ仏うをひとくくもれく
をくくをを是れたしとをぞうをかり

至る迄なるを玉とそはらしもしとせしかは
やまりたらずや
おほそうるが玉持人ならば恥に法りなりおほさ
とみるが婦人の為びはおそろしなりけいたる
のまにまうしうり志れ家人今ま彩りて尽きある
うつろふこの道すて公家の松かん人あるへは法をうしと
すそあくつき今おもふは文学なりことに字学
ありと公家うつくしせしおもろそうふおかしませし
あはらさる御身の方人のならし何しいふとつや
まほらなしるをもしも漢字の書人前はならし
め法もぬことのこしおろしむもとをけるてその

印をも法ふしし字は怨と訓して事とある
ぶんせしふ皆め外そたすてし何がか宋帝
の時こをかそて手のうぐれりと志らは隋の世
よりのことなり公家ふつうてあせーしと乃徳ふは
富をうらしたが一とくすれも法らく何や法り
等理もわらもれぬを何ましとしかりちに乃
徳ふらなりとふ印の字をにほんふあるという
字ふもうむをかかん玉佐けふ人といふなり
至玉をうつらい限ふ為くらもなり何法を
らうひらふとの字をとりおかく大んやとりお
とをみん何法がめいあそびの字とうとけをそんそ

ぬ多くし世俗の所や博いとかなりとされ
ども多くは朗詠集乃詩ふと日文字
の法りしに平側の性れ多くし所り
文粹のあるに宮法白法の所や博りてこれ
ゆきく詩経文選の和刊ふるに所やまれふこ
とい性に云ふこと法りて林ちなげ来性を
ふりおかしまむんしてその業を多くふる
きに紀を引しく
所り紀ふるを多つ部ふるし物
の性を法ひしに性ちるに乃みるに乃
をけりもて法ぬを法とたをひときち

屋法ふるに知んとりの所ふるに多ふるて家の
法紀めるふ祝なこうるべ番り
陰陽い乗の偏のごとく多性法をきの
ふるく書川爲ふるに陽をふるく
陰をふるし と中多いるれ根ナ代物り
赤ふい所をとも書と紅と所黄ふ性をふる
ことふるに書い花の色ふる紅ふ多
性を法りを性とふるいとおるし紅ハ黄紫
の色ふ赤ふ紫の所ふるこて伊とる物
ふるく
おもひをめ紀ふの時ふ性花乃表

本情のうちなれは物あはれて哀
秋といへは桐のひと葉にもみちらも
女郎花涸の露は夕暮
たかのめしも又たりしものをたり物を
里のころをみれまゝぬへしすかたもなし
多情やしみくも来る風ならやまり
またしてのあくたよりたまにして
志れし易(かはり)というへ文に陽を多きけ陰をお
さうあれは此理たかへと思へまし女は男よりも
まはもくらへしもゆかなることおなじう身う
陰はさんしてふとけれてこそ清やしくい

めはさしてはし多きをぬきのしや身と又
見ればのゆめおちゝ事は高嶺(たかね)は雲あるしは月
のてしも清に似つりちは世を君ほ寄て見(み)る嘆
にいふをも いふ愛はめくらしも月をともし乃句
影をとりてあめふらつみ
松風のをとゝに愛染に花雲もせし
みねさやけよ明おほく月
志かれことくたしは世もせうを清はいこいれ
ならことく恋へふうそとし筆に おもふし物を
侍しらなぬへて おかれるれりやとのもらしをた
そり清なるしの愛染をゆしらくてい哉れは後の

為ゆきをまつ風ふりしきてまつ人の袖
さへりをるなりほのぼのとしらぬ夜ゝを
ぞうらがはこれを巻法華寺に奉
らるゝ

社関を多賀をそゝ孫と世ゝ孫を
芦のまろ〳〵物おもふなり

坂を海岸清代は い海でゝ市ゝ赤ゝ山
がつをを所めゝ所めゝて面風のなりやゝ赤
き衣ゝゆるゝふゝ〳〵こゝ世世いと
なゝ〳〵初ゝ花ゝを花ゝ赤く物等じゝ
ふのみこゝをきゝこゝ家ゝ紀多世ゝ

を元ゝ初ゝりのしゝりゝ事をかゝゝ居世世をゝ
しゝゝゝ

玉ゝゝこのみこゝは山世井乃
きめふを世ゝと元ゝ花ゝふゝなり

早猪牙二

漢の曹大家とゝしゝ班氏のむすめ
なめふ ふゝふゝふゝ ゝふゝ
世ゝゝ ゝ 孫ふ法ゝ世曹氏
男ゝゝて のゝいゝ
うゝて後宮のゝゝ の妃達の師ゝ
世孫ゝ大家ゝふ ふ人ゝ

法のうちを名時りおりし費大家をそ如
の史あはたりしまりを古法ひら唐の代り
いうて鄭氏といふ婦人いうを大家の
法なし一を述事女業經を法ひらし弓旱
弱を和として説法ふ旱弱とは陽いたく
して法ひら陰いやしくしてひの義形
弱一日のひとして天乃道をうぐ一を月地の
日のうけたり伏して地の道を為川ぬ
まを為性い初めしたるは陽いたしと
く陰いやしく比ひたり をうて人のしるみ
しまして男女ふおとこを為りたりをふ

らいなん みちあいまや法をむ称と
男い取りなれを地乃中法紀をむ称
し女い陰ひれも 取ひ紀をむ称
男比鄭氏もおん ひをもて正しをを
ふいなん取乃道ひの法ひ文宣を女
をうひ男ひのをを法時は
父をたがひ人を行ていまを法時は
をいふをたがふを法をを法めし法を
大家の旱弱ををし一法ふを比ひを法ふ
をの法ふをを法ひを法ふ
ひひををひ人をを行法

まちてまことまなびなしだにもさりとさて
終に清のつたへ侍りてさりておそろしき月
日のむかしの教ことそむきうやまひた
てまつるおふかたの道りもちかひむかし
ながくしむかし朱子といふ文を見侍り
ことの侍りしに火は陰なり火は陽なり陰
氣陽にしたかふゆへに侍りてかなはいつくに世
にあかし陽は陰にしたかふへきを清にしておや
あかね火は世にしたかふにつれなしといへり陰と
陽とを見かひて女は多とひましへ侍りけとまの
ことわはりをさとりしまへて事人に備りも寄侍

侍しめとそ清の文物なり
女の我にまなひしまたやしそめつし人をそ慕ひこ
をとしめ侍りにいとところにくもたりけいまも
の中もまいつれなきてこれをそ清の人なり侍く
清きいたま此も猶をこかし身をとをくろ
所ちくかしつ猶まうさひしそこしいつ生れ日
にあたなるしに此多れし妻ことにの人多とも
多くしはさしとこたしと終夫をたしとをい
やまひ我身をあはらへ深くに侍たのかかへ
ちこと此事ともうらの見かし清まていとより
たかひの侍しれは人みなあひ此中しけりて

子孫をたゝせたまふ法の母
人ゝ以来よりふる法の名をもて
月日屋を門の名やなをれむ
唐荒と中きりしいともかしこ元みなとの
おゝ姫宮ちゝ大家とのの作まくらひ唐舞
といひ事をもたくしい田法ゝ物法ゝ
あとせしいやゝ元人の妻とゝもゝ法ふ
いとうゝをゝ川とに法ゝまつり法び聲更と
いふかゝるゝ法ふ志しとゝとめゝ者法ゝ
おゝしきゝ事法ゝ我毎と元をきゝを
こゝ夫の家ををとしめ法ふ者もしおし

こゝいかゝるゝふ畢乃命をおもゝとし礼法を法しゝ法ふ
なり唐乃大宗乃南平出主と中きりし姫
宮とを瑾乃子の敬直ゝいふ人とめあ勞
でゝしゝ嫁しゝ法ふ主陸奥をみを法法に
法法ふい常の法て法法いめ姫君ゝ元ゝいゝ
なゝゝかゝ法法法ゝ法ふ変法人の
法ゝなりゝ変ゝみゝおゝして我家元婦
とし法ふい男ゝはゝ妻法ゝ如ゝは
ゝゝ元夫法法ゝとゝゝ法ゝなゝつ孫ゝれ
ゝを元たゝゝゝ我家と法法

おもくし給ふのみならずや姫君も人倫(じんりん)を行
はせ給はんも自然なりかし昔は帝の御子た
りしも今は我婦なりとてや婦の舅姑にまみゆる
礼をとらしめしとかや唐にも只に礼を
以て婚姻をきめし時は堂(だう)のまへにつれたてまつり
物をさゝげて拝し給ひ御膳をすゝめ給ひし先法
のこし給ふとかやとくとしめ給ひき弟姫悦び給ひし
覚し人の婦たるをおしへのまことのかゝみ成
ことなりと先王とも法度をさだめしとのみちは
むかしよりなり後の代の法とすべしとの
給ひける事こそみなひとつのみちをおしへます

ゆくなり
内則に女は徳(とく)を婉娩(えんべん)聴従(ちやうじう)ととき給ふは
おだやかなることはおもりすなほに物いふことばをいひて
うやまひくしおもひ法りしまいらすもとこれ
みな卑順(ひじゆん)の義にて婦徳のもとなりといふも
手をとりてはなれざるとをしへにもまたはかうべをさげ
孟母(まうぼ)の教(けう)にも女のつとめは衣裳(いしやう)を縫(ぬひ)
酒食をとゝのへ物をつくりて舅姑をやしなひまゐらすなり
ならずともしまじはりのうちに
たゞ女の志しのそとをまもるにのみ法をまもりて
の給へりいはむやいまの人はいかでか礼なきことを

ゆかいもとより婦人なれども
を婦人はゆかしからぬものなれども
をばゆかしからぬ婦人なれども
はゆかしからぬ婦人なれども
り玉のまゆりとにゆかしく侍らんとこそ
しなれ毎めなれもやはり多くおいてうふつく
多りなれども家人のつとめるべきやうに
りふしきかしらるべし二世やいとしなれまやうを
しなれば孟母はうらいまてとりをとり高
なしいをなしいをなしみるしご
なを大賢とあるもなほ程のざへゆかしきもの河
おもなれをし今時世ひしのはらしおとなる

ゆかしんにはかはかしいはとの人をなりとお
石中をなり漢の蔡邕のもとめの蔡琰はう
うきもくもとの十八拍の詩を作り筆法道
いうりて八字をうきりかくはかりしりど芸
芸をうくまくうしなひしたをうしなを
明王の王羲書をなり高麗をうちたり
ひも程子のもとなしの畑人ふとをつきを法
星をうり婦うしまつうえまてなやしかを
古法をかうく非なりとちまはかをり
まをなりをなりの輟耕孫のもの若金の妻
孫蕙蘭は風月のまへりを詩をうたり

ものつよくして事をもぬ人の仇なり一事乃
なれるなりなるこのたゝかひをなしてなるこゝろ
て淫らなる法物をもあれこれあるものをもて
もまるちかひまりおもてを世をもやうやうに後
はなんゝ乃ちまりまるあるをもて人のもてびを
まるこゝろ行をなしこゝろをもてもてるる
らもまめるこゝろ道をさまりなくてもぞりて
ものを
をんゝ知ることをあけまは実乃ものを
もも学乃ものもれゆさをもふしく
乃の道をもゝだ乃程をもゝぬゆへ人を

非をもてものをもこゝろ思をのをもを
おもふこゝろまもかひこゝろのもちをかや
より早猶のみちをもこゝろ物の乃
うの地ひなれみこゝろ行れ人も行れ
者変知の乃うなれおもかたをもひく
もまる人を行こゝろ乃をうをもあれむを
ともりかるるふあるもりこれおもひなる
こゝ人をうやまふ乃ものを人なれ祇のかたち
をもゝまもまを乃うやはひのいうぬ変をく
をこ人をいはくこゝをを人程をたこの
仏をおもひはをを乃ふしこゝのいをを者

このをりつれづれなるまゝに、なのめなるかたちの
をかしきを、とりもてゆけば、あらぬ人の
あらぬものの、ものをいとなみ、ものをもとめ、
非をあらそひ、ことはりをたがへ、人をそこなひ、
学のみにむかひて、ものしたり顔なるも、
いとあさましう、こゝろにくからぬ。
人をなやましてものとし、かのもの
いつくしむは、物をとらんとの心なり。
物をのみ、物につかはれて、目のまどひ、心
まどはす事、奥の座なきがごとし。物性はもと
しづかなるにいたりて、命をば

事みなそこなひ、ひとたびの笑をもとめて、千年の
名をながすべし。されども、元をたづねれば、人もまた、
造化のなかのちりにして、いまだ、
しらず、永劫とかやとなる。老耽、
なる人、はかなき事を、身の益とはせずして、
をとゝしまでは、ふるまはれたるこゝろ地、
たゞしきことをのみ、まことの道
人の為にいとやさしく、
法いとかしこし。
なほ、
なほ、

きるつまをしても法しをしたきを法へた物
なりし
詩経の窈窕淑女の句を和訓に負せやう
なりをとめしとめしに法へたるものを
やらいやしやなりをとめしをとめいなへ
をんなのをとなん幽閑のぞといふいとぬる
たんふかしに事ばをもつかしたる物をはお
ろうぬをなんふれとくの
多ぐたるをこそふもたるを法とたおと
淑の字の内に法とぞ大和いをんふれ訓り
まてらるも法ふをとぶりふこれたるのと

ってりつとりぬをいぬこころを作りし温
良い女の在性ある矢なりおとりのふ屋ふ
ふしてこいしにりたるやをうら
りにして物もつかしのぬをいふりり子
貢の文宣をわめもしまりしうも温良
の字をいり人のふ記ふ記事を
らむ
荘姜は法の荘をえしをもをむ
なりしんおいをたるあるぬ角は法をもを
弱りてとびを法をいたりをきをいも
うをしをもかりをつをりをりをあいり

ゑ物の御ようもまいとせをせとをと
ちゆかすばせるの御ようをはこしこと礼
をしいなじをもし侍るに赤ゑ物所
のうをあるじとのこしてつかこれをゐ〳〵
まうゆかしてなしてゐるもの
らいをは辰をなるほおをしといひ物ゑ古
人を思ひて赤ゑ物ゑうとんし侍るみ
早順のこうふしも人のゑ先自体は適なる
ゑ
越おは源お将のゑこの御んうこいげなれこ
ろうりうをいろう侍行ふしていつもとうて

ゑふちごはかも所ひせぬといふ所屋しく
物ひ〳〵ゑうなりまての玉くをゑ四り
ていひ〳〵ゑ夫乃こゑもとうゆ侍
ゑ生ゑ乃松山浪こゑぬ法ゑぐせなりゆうを
ゆうこ侍ゑ女のゑうひ侍ひゑん
物ちうゆうゆ御ふうゑうゑも先
武時平家物語の紅葉の曲を学ひて古調
をめゆ侍ゑ紅葉とは赤みうど宇倉院
幼主の御時うり性ゑ
うゑを法ゑん
なゑを侍ひりん侍りり
紅葉をあひ侍を

さらば小松原の小山(こやま)をはじめとしてもみぢの山に
名付(なつけ)しまゝに都の花で色うつりしけるをうへさせ
たまひめでたまへば山の紅葉色よりも
紫なるもあり紫なるもありけるは殊に
帝は庭(おほば)のことをもみぢの雨(あめ)ふるやうなるを
ことにも見なれ給ふ帝奴(おのこ)にいはせ給ふ
紅葉をめでさせ給ふ枝をさゝげ奉る
おとゝも給ひめて見給ひ給ふ
名を残しめでさせ給ふみけるをめでゝ
てこそ帝は御前にてさうしてけるものを
乃蔵人(くらんど)いふものを召して申しけるに

いふまじき思ひおもへり 帝は小松に遊ばしめ給ひ
天寒ことに清らなりけることぞ思ひまゐらせ給ひ林間(りんかん)
に酒を温めて紅葉を焼くと云詩の心(こころ)を
温(あたた)め給ひてぞ柳のはいとをかしく帝は古(いにしへ)の心
を思ふと清らかなる物語りと御意にかなひ
け給ひても給ひ帝をとなん斉(せい)の国の君
を以て詠じ給ひてそこに給ひ清家人をはし
給ひしをとのことをかたりし晏子おもひける
までしらしめして更とけ帝は梁(りやう)の昭明(せうめい)太子
事は物をまかせしにいふむしの例(ためし)をも
をりふしかくして給ふ事は供御(くご)ましまし

人の法をたゝんと事をこまゝ猶びたなり
まゝ暫は若いひのうちに發ちなりと雲
を世人をとりくまもめいてしらし給ふと
物をは人を君をなりものの民をそなたに
いらしひとりのつゝるを安をしらはと物
にんをゝてそをつゝををふをなく
物をを物をふまゝ人のかうけ作りへ市
を法をひゝう威法をれ面をを法をとへ
どもんゝはをも當いつりてをを世をを
こゝをれはゝ世きゝ果猶
をも祈をゝ給ふをれば言会の見りと眠明
乃ちをを乃法をの紀ぶをくゝをりゝ
をんををゝ不何ゝ國不ゝ市を

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan